

奄美大島聞き書き民俗調査実地体験報告集

近畿大学文芸学部・文化学科・日本文化・歴史コース・藤井ゼミ

奄美大島ケンモン聞き取り調査

大歳恭子、三田村咲子、浦田沙織

奄美群島は、その位置的特徴から朝鮮・中国との交流や琉球、大和などによる介入など、日本本土や沖縄とも異なる歴史・時代区分を持つ地域である。奄美独特な民俗としてケンモン（ケンモン）と称される妖怪についての資料・聞き取り調査の報告である。

まず書籍や資料などによるケンモン像をまとめると…

●外見…5～7才くらいの身長で、体が赤色っぽい体毛につつまれている。黒又は赤のおかつぱ（又はハグ）で頭の上には油のしみたお皿があると言われている。耳が逆立ち口が尖っている。かん高い声、山羊のような腐った葉のようなおい。●生息地…ガジュマル・アコウ（ホウギ）の上、山に住む。●好物…魚の目玉、魚介類・デンデン虫。●人との関わり…相撲を挑んできたり、仲良くなる面や一緒に漁に行くと豊漁になる。仕事を手伝ってくれるという面がある。しかし、イタズラ好きで石を投げてきたり悪口を言う嫌がらせをすると目を就く突く（「ケンモンにヌカレタ」）砂糖炊き鍋や塩炊き鍋を壊す・人を傷つけるなど怖れられる面もある。

キジムナーや特に河童と共通する外見や性質があり同一化される面もあるが、

1、河童は水中が常の住み家でケンモンは陸に住み水に入るのは稀。2、河童は背面がうろこか亀の甲羅とされるがケンモンは毛で覆われているといった明確な違いがある。

ケンモンの誕生として挙げられるのは、次の2説である。

- ・ある兄弟は、兄のユネザワ、弟ネブザワと兄の妻が登場人物であり、ある日の漁で弟は出来心で兄を殺してしまう。死んだ理由を嘘つき、慰めながら兄の妻に言い寄るが、四十九日に海で上がった夫の骨を見て妻は殺されたのだと確信する。妻の仇打ちを受け、死にかけたところに神様に助けられケンモンの姿になった。みずぼらしい姿を取じたネブザワは、本名の“ネブザワ”と呼ばれることを嫌うという。
- ・ある幼い兄弟が、祝女の養子に入り、ひどくいじめられていた。

継母に木を取ってくるよう言われた兄弟は、木の種類も分からないまま森に入った兄弟は、何も取れずに帰ってしまう。その事を叱られ、また森に行かせられた兄弟は、そこで太陽神テダクモガナシに出会い木を教えもらいこれを継母に投げて渡す事を言われた兄弟は、その通りに継母に投げ、殺してしまう。森に泣いて戻り、テダクモガナシと出会った場所にいたところ事情を聞いたテダクモガナシは、兄をケンモン弟をウバにってしまった。

次に聞き取り調査でケンモンについて二名の方にお話を伺うことができたのでそれぞれについてまとめようと思う。

・義永さん（奄美で生まれ育ち、十七年程島を出て古仁屋に帰った義永さんは実際にはケンモンと会った事はないが、様々な人から見聞きした話を聞くことができた。）

・小学校の校長先生が塩炊き小屋でケンモンを見たと言っていた。・相撲が好きでしつこく挑んでくるので辛くなるのところに連れて行く。・ケンモンの足はつるつるしているので、芋畑ではすぐに勝つことができる。・若い男の人が行方不明になった。三日後に見つかったが、ケンモンにずっと接待されていたという。ごちそうとしてでんでん虫を食べさせられていた。

・ヒロシさん（於斉に生まれ育ち、現於斉区長の父である。十九才で地元を離れ、二十年程でまた島に戻ってきたという。ケンモン体験を三回している。母の家系がノロにあたり、独自に天照大神の信仰もして神心があった母の影響と自身も神心があるから見る事ができたそうだ。）

「一回目の体験」初めてケンモンと会ったのが中学三年生（昭和二十五年）の時、家に帰ってすぐに父からお風呂の薪を持って来るよう頼まれ、所有している山に入り、その途中のホウギの木の前で3人見た。大きさは人間でいう6～7才くらいで逆三角の顔に、全身赤茶色でうろこのようなものがついており、頭はハグ、鼻が高くすねが長い。「わっわ」と小さい子どもをあやす母親のような声で、両手で貝を上に向けて遊んでいた。しばらくするとぱっと消えた。

「二回目の体験」 同じ中学三年生の時、父と兄と三人で塩炊き小屋で塩を炊いていた。すると晩に小屋の周りを囲むように十人ぐらいの琵琶を弾くようなケンムンの声が出て、父と兄を起こし、急いで塩をつまみに詰めて帰った。

「三回目の体験」 所有してる山から帰るときにすごい音がして振り返るとハシの木が倒れているのが見えた。急いで木の所に向かうが倒れていなかった。他の人に話しをすると何回か同じ経験をしたと言っていた。ケンムンは力が強くて馬をも殺す力がある。

他にも…

・奥さんのおじさんから聞いた話だが、お祝いの席で食べ物なくなったり、体をつねられたりした。周りを見ると何も見えないが、着ている着物の袖から覗いてみるとケンムンが見えた。・木を切るときは一気に切つてはいけない。木にオノをたてて、ものが悪い場合はオノが震えて落ちてしまう。それでもその木を切らないといけない時は他に他のいい木を植えてから切る。・野宿をするときはケンムンや、悪霊などが近寄らないように「この※1オグチの下には※2メグチがや今晚一晩宿を貸して下さい。※3ヨウネの神ヨウネの神」と唱えて自分の周りに手や足で円を描くとよい。という話も聞くことができた。

※1、2 昔の家の屋根の柱。突き刺している方がオグチで穴があいている方がメグチ。

※3 今夜という意味。

考察と感想

ケンムンはその存在や事例が多数あるにも関わらず、姿がはっきりしていない。頭は坊主で、全身が毛に覆われている一方で、河童のように毛と皿がある。全身は、うろこであるなど姿すら定まっていけない。これは一つとして、本土の妖怪話がケンムンの話になっている事からも本土や沖縄の影響が強いと考えられる。次に、ケンムン=河童という考えが広がり、先入観や思い込みが本来のケンムンの姿を変えさせたという考えもある。

調査をして感じたのは、上記の理由の上に、奄美の人々のケンムンへのこだわりが、各自の思うケンムンを作っているのではないかという事であるという。ケンムンを目撃した人はその姿を話を教えてもらった人はその姿をケンムンとして定め、まだケンムンの話はしてはいけないと言う人もいるが、軒先でもケンムンの話をしてよくなった今、ケンムンの姿や話が多様化したのではないだろうか。姿や話の他に、奄美の人々のケンムンへの気持ちも変わりつつある。ケンムンがいてと信じている人が減少しているのである。遊び道具や年長者の話が聞かれない、妖怪話が信じられなくなり、ケンムンがただの昔話となっているのだ。

しかし奄美においてケンムンがただの妖怪ではなく、人間関係を潤滑にする、自然を守る善悪の基準としての機能を持っている。ケンムンがいるから危ない時間には帰る、山は荒らさないなど奄美博物館の中山先生曰く「自然の番人」であった。ケンムンは奄美が長い時間をかけて生み出した独特な存在である。ケンムンの本来の姿を研究し、それを広げる事は、奄美の人々の価値観や奄美の民俗を発見し守ることになる。またケンムンという存在がきっかけとなって、子ども達の郷土愛や理解を深め、奄美民俗の保護につながり、教育の指針となるのであろう。

参考文献：奄美のケンモン・恵原義盛・海凡社（1984）・奄美の民話 第2号

奄美の信仰について ～ノロ、ケンムン～

牛尾成宏

今回の合宿において自分は、奄美における信仰について調査を行った。これは、その中でノロとケンムンについて簡単な概要と考察をまとめたものである。

ノロ

ノロは琉球文化園に見られる祭祀を行う女性である。琉球から任命されているもので、新しいノロは一生に一度、琉球に貢物を持って行く。そして、琉球王の姉妹神（おなりがみ）である聞得大君に辞令書を受け、正式にノロとされる。ノロになるのは血筋や権力のあるなし関係なしに、超自然的な力を持った女性である。人の身辺や相などのことを当て、ハブ除けやお守りのまじないなどもよく知っている。口寄せのようなこともできたという。

祭祀は、ミャーという集会所のような広場に建てられているアシャゲで行う。茅葺きの小屋で、壁がなく、床はあつたりなかつたりする。ノロと十人ぐらいの女性が集まって行うが、特になにをすることもなく、みんなでおしゃべりをする。供物は集落の人たちが自分たちの収穫物（作物、狩猟物、採集物など）を供える。金銭を納め

ることではない。

以上のように、ノロは集落という共同体において中心的な存在であった。信仰の対象であると同時に、琉球に任命されていることから公務員的な役割をしていたとも考えられる。では、ノロはなぜ信仰されたのか？ノロは普通の人には見えないものが見えたりするので恐れられたりもしたが、集落の人たちはそれも含めて崇めていた。それは、地域において様々な問題を解決し、人々と密接に関わっていたというのもあるだろう。しかし、信仰というものを考える時、信仰の原点には自然を恐れ敬う感情がある。その自然を神格化することで、神を恐れ敬うようになったとしたら、ノロに対する感情もそれに起因するといえるのではないだろうか。ノロに限らず、人間は異能者には恐れを抱く。それは異能者たちが一般人には知覚できない力を行使するからであるが、同時にそれを頼りにする。それは自然の災害に恐れながらもその恵みを頼りにする様子と非常に似ているように思える。

ノロ信仰（またはそれに類する異能者信仰）はそういう原始的信仰に近い形のものであったが故に人々に信仰されていたのではないだろうか。時代の流れと科学の発達による人々の意識や価値観の変化、新興宗教の流入などによって、人々はノロから離れていき、ノロはその姿を消していった。その姿は同じように人間が離れ、その存在が薄れていく自然信仰の姿と重なるのである。

ケンムン

奄美諸島にみられる妖怪（妖精）の類い。山に現れ、いたずらや相撲を好む。赤い体で頭はハゲもしくは血がある。ハゲでなく、血もないというのものもある。肌は毛むくじゃらが鱗で、体育座りをすると膝が頭を越すのが特徴である。ガジュマルやアコウの木など特定の木に宿っているものとされる。このことから琉球（沖縄）のキジムナーと同種のものであると思われる。また、本州の河童に見られる特徴も見られる。これらは奄美の文化が琉球と本州のそれぞれが混ざっていることを示唆している。このことについて、自分は、奄美に見られる文化の中には琉球なり日本なり、それぞれの文化の原点を残している可能性を感じる。

ケンムンは一般人から見るといささかコミカルなイメージが強い。実際、そのようにとられる行為をとっているわけだが、時には人間に警告を発する存在となる。夕方に山へ入ろうとすると現れてやめさせたり、危険な場所にも現れ、近づかせなかったりする。無論、あったという人の話であるが、重要なのはそれを他人に聞かせることである。山に入るといっても危険な場所があったりするし、時間帯によってはハブなどの害獣が活発に活動し始める。しかし、そこにケンムンが現れればどうなるか。人はそこに近づこうとは思わなくなる。つまり、結果的には未然に危険を回避できるのである。

ケンムン村の中川清美さんはケンムンを「森の番人」といっていた。それは自然を守護するという意味だけではないと思う。人から自然を守ると同時に、自然から人を守っているとも言えるのではないだろうか。そこには人間の自然に対する意識が強く表れている。

人は自然の一部というが、人ほど自然に介入できる生き物はいない。生物が生きていくためには、ある程度自然を消費せざるを得ない。普通は少しの消費で自然のバランスは崩れない。しかし、人間はそれを崩してしまう。数が少ない内はそうでもないが、人が増えるとその消費はすさまじい勢いで増加する。昔の人たちは自然とのバランスをちゃんと意識していたのだろう。ケンムンという存在はそれが具現化したものだといえる。人間と自然のバランスを取るための存在として機能してきたのである。奄美の人たちはそれをわかっていてからこそ、ケンムンをその目を見たのである。

ケンムンもノロ同様その数を減らしている。それはつまり、自然と人が離れているということだ。かつて奄美では裸足で山に入ることができたという。それほど山の中の道が整備されていたし、人がよく入っていた。それでも自然とのバランスは取れていた。今はどうだろうか。山の道は草で覆われ、山中の神社などは人が寄り付かなくなり、廃れていった。自然は（表面上は）増えたのかもしれないが、はたしてそれはいいことなのだろうか。自然を放置することが正しいのだろうか。結局それは逃げのように感じる。不健全と感じてしまう。人間と自然との関係はバランスなのだ。どちらか一方では人間的とは言えないのである。一方的に自然を認識するから、自然を実感できないのだ。自然との距離感が取れなくなったからこそノロやケンムンは消えているのだ。そして、それらは人間間の付き合いをも侵食してしまう。自然信仰とはこれからの人間の自然に対する生き方を考えさせるものだと思う。そして、その原始的信仰の色を残すノロやケンムンは自然との本来的な付き合い方を教えてくれるものなのだ強く感じた。このことを感じる事が日常で増えれば、最近の人間が忘れていた、自然や社会のバランスを意識できるようになるのでは

ないだろうか。

奄美の墓制について

向尾美香・奥村美美

骨を納める墓の形の変遷

清水で墓地の位置を三ヶ所教えていただくことができたので、その三箇所をまわりました。そして、そこで見られた墓の形と年代を調べ、墓の形がどう変化してきたのかを調査しました。

奄美では昔、火葬ではなく土葬が行われていました。土葬された遺体は埋葬してから数

年後に掘り出され、洗骨と呼ばれる作業を行ってから、水がめを利用した骨壺に骨を納めていたそうです(写真1)。写真(写真2)を見ていただくと分かりやすいと思いますが、この頃は墓石は置かず、どこに埋めたか分かるように骨壺のふたの上部が見えるように土の中に埋め、その前に花と水を供えたようです。

やがて、墓の目印として墓石が置かれるようになりますが、この頃の骨壺は墓石の後ろに置くようにし、埋めませんでした。初期の墓石の形(写真3)には屋

根のようなものがあったものが多く、中心部分には丸い穴があけられており、中が空洞になっているものが多く見られました。その空洞に位牌のようなものが納められている墓や穴が四角いもの、穴をあけずに直接故人の名前が彫りこまれたものも見られました。清水の墓地で見られたこの形の墓石で年代が分かるものでは、1700年代の初め頃にこの形が多く用いられていたようです。

その次に見られる形(写真4)は、上部に屋根のようなものを持ち、その下に丸い形と四角の石を重ねたような形をした墓石です。年代は1700年の中頃から1800年の初め頃のものも多く見られました。

その次に古いと考えられる形(写真5)は、内地でも見られるような四角い石を重ねたような形をしています。年代は1800年代後期ごろのものも多く見られました。

この後、奄美での埋葬方法は徐々に土葬から火葬へと変化していきます。土葬のときの墓は一人につき一基ずつ置かれていましたが、火葬に変わってからは家族ごとに骨壺を集めて墓の中に納めるようになりました。それにしたがって、墓には骨壺を納めるための四角い形をした土台のようなものが作られ、その上にこれまでの墓石を乗せるようになりました(写真6)。それ以降の変化として目に付くのは、骨壺を納めるための扉が後ろから前へと変わったことくらいで、この形は現在も奄美で多く使われているようです。また、この形の墓石がいつ頃から用いられるようになったのかは詳しく分かりませんでしたが、古仁屋で聞き書き調査を行った八月踊り保存会の山下幸子さんによると、古仁屋で火葬が行われ始めたのは1900年代中頃だそうなので、その頃から用いられるようになったと考えられます。

また、今回の調査ではお地藏さん・お坊さん型の墓(写真7)も数基見られました。しかし、いずれも年代がはっきりと分からず、聞き書き調査を行った清水の川畑文弘さんによると一番新しく、古仁屋の山下幸子さんによると一番古いという情報を得ました。どちらも近くの集落であるため、地域差ではなく記憶の差によるものだと考えられますが、正確なことは不明なため、この墓が土葬タイプの墓石としていつ頃の年代に当たるのかは、さらに細かい調査を行う必要があると思われます。

土葬の方法



▲写真1



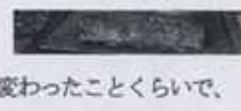
▲写真2



▲写真3



▲写真4



▲写真5



▲写真6



▲写真7

甕に骨を入れるという文化は中国南部→琉球→奄美へと入ったもの。
が、奄美大島には竈がないため、琉球と鹿児島で焼いたものを運んできていた。

1. 人が亡くなる。
2. 棺に入れ、穴を掘って埋める。
(於済の池田さん、行村さん：座らせて。清水の川畑さん：寝かせて。)
3. 7年か15年経ったら掘り返し、洗骨。布でふく、水で洗う、海水で洗う etc..
- (4. 池田さん、川畑さん：洗った骨を焼く。)
5. 甕に足のほうから順に骨を洗う。(焼いた骨の灰を甕に入れる。)
6. 墓石を立てた後ろに甕を置く。

葬り方が変わるとき…

1. 風葬→土葬
「埋められたくない」「大切な人を埋めたくない」という意見。
2. 土葬→火葬
「熱い火の中で焼かれたくない」「大切な人を焼きたくない」という意見。
清水の里さん：土葬用の自分の墓を用意。
八月踊メンバーの1人の方のおじ：土葬にしてくれと遺言を残す。
3. 内地では霊魂は忌むべき存在だが、奄美の甕には穴が空いていて、その穴から霊魂が出入りする。という霊魂に対する意識の違いの存在。

つまり…

風葬・土葬・火葬 etc. のうちどれが優れていてどれが劣っているということではなく、その地域に暮らす人々それぞれの考え方が重要。だから、先入観や偏見を持って調査するのではなく、その土地に住む人の思いも事実と一緒に調査することが必要であると感じた。

奄美大島の正月行事

正木宏治

私は正月の年中行事について調べました。調べた内容としては、正月の準備と正月の元旦に始まって正月の終わりまでにすることを中心に調査しました。

●正月の準備

- ・ まず、各家庭では正月の準備として、4・5日前に豚をつぶして、海岸で塩漬けにします。この豚は正月の料理に出されます。また、豚の血などは装飾品の色づけなどに使われたりします。
- ・ 豚をつぶし始める頃から、門松を立てたり、注連縄や鏡餅を飾ったりし始めます。

門松 奄美大島での門松はマツ、タケ、ユズリ、シノの木を結わえたものを玄関の両脇に飾ります。また、奄美大島では、門松とは別に、ユキマツというものを飾ります。これは、マツの葉を切ったものに脱脂綿をつけ、雪に見立てたものを床の間に飾ります。

鏡餅 ウラジロを引いた上に餅を2段重ね、みかんとピーナッツを飾ります。

年越し料理 本土で食べているようなそばを食べる習慣はなく、ツブキをゆがいたものと豚の料理を食べます。

●元旦から正月の終わりまで

1月1日 若水汲み

ジョヤの爐がなると同時に家の近くの井戸に水を汲みに行くという行事のことである。この行事は誰よりも早く水を汲みに行くのが縁起がよいとされています。

1月1日 三献。元旦の朝には、三献という料理を食べます。これは1番最初にお吸い物を食べ、それを食べた後、魚の刺身が運ばれ、それを食べ終えた後、豚肉料理のシエンカンを食べるというものです。

1月2日 農作業の豊作祈願祈って、ソテツを植える日です。

- 1月7日 七草粥。この日には、七歳になる子供が親戚七ヶ所の家を回り、七草をもらいに行きます。
 1月11日 もち煮り。この日には正月に仏壇などに飾った餅を回収して、食べる日のことです。
 1月14日 餅ならし。この日には、山からきってきたブツギの木にもちを刺し、玄関や床の間、墓に飾ります。
 1月16日 農作業など何もしない休みの日。

以上のようなことを奄美大島に行き調査しました。まだまだ調査の経験などがすくないこともあり、うまく調査できていない点も多々ありますが、奄美の文化を直にお年寄りの口から開けたことはとてもよい経験になりました。

奄美（本島・加計呂麻）における稲作について

山下洋平

今回は主に、加計呂麻島於齊の広山毅さん（昭和5年生）と瀬戸内町清水の里力さん（大正11年生）のお二方にお話をお聞きした。現在、奄美大島で稲作がおこなわれているのは二ヶ所だけである。しかし、かつては多くの集落で稲作が行われていた。そのほとんどが二期作で、場所によっては三期作のところもあった。しかし、減反政策以降、奄美大島での稲作は衰退の一途をたどった。全体的に奄美大島の耕地面積は狭いため、稲作だけで生計を立てるのは難しく、漁業や狩猟、その他の畑作を取り入れた形で生活が営まれていた。

●加計呂麻島於齊 広山毅さん（昭和5年生）

品種： 早稲を植えることがほとんどだった。黒米・赤米は植えなかった。

種籾： 塩水選などはしなかった。自分でもっていた蔵で保管した。

苗代： 苗代に初を蒔いて、約2週間ほどで成長した。

耕地： 広山さんの家の耕地は田が約9反、畑が約9反あった。渥田のことをユビダと呼んだ。於齊では、ユビダが多かった。旧3月の初めにアラグナ（アラオコシ）をした。アラグナの際、牛や馬を使った。だが、牛や馬を持っている人は一部であったため、貸し借りをした。耕地面積に応じて、賃料を払った。田植えの前に、ウエジルをした。

肥料： 肥料にソテツの葉を使った。

田植え： 一期作目の田植えは旧4月初めにした。二期作目は旧6月の一期作目の稲刈りが終わった後、すぐに行った。田植えの際は、ユイマワシといって、近隣の人十数名が手伝った。田植えの家主はその人たちに10時にお茶、昼にご飯、晩にご飯と酒をふるまうのが一般的だった。植えるのは女性の役割で、男性は田をならしたり、苗取りなどをした。

草取り： 5月に2回行った。一回目の草取りのことをアラクサと呼んだ。二回目の草取りに特別な名称はなかった。

灌漑施設： 田の水はほとんどの家庭が湧水を利用した。

害虫・害獣： 特にウンカに悩まされた。手でとって駆除した。

稲刈り： 一期作目は旧6月、二期作目は10月の下旬～11月の上旬にかけて行った。稲刈りは、田植えと違い、各家庭で行った。稲は乾燥させる人もいれば、いない人もいた。乾燥させる際は、海岸にかけておいた。

脱穀： カナダ（千歯こき）で脱穀した。その後、海岸の風を利用してよい籾と悪い籾の選別をした。

その他： 小正月にコガネモチという小さな餅を作り、ブツギの枝にさして、玄関や床の間に飾った。コガネモチは赤、青、黄に色づけた。

●瀬戸内町清水 里力さん（大正11年生）

品種： ささまざまな品種を植えた。早稲、晩稲も植えた。赤米、黒米は植えなかった。

種籾： 塩水選はしなかった。

苗代： 苗代は集落の人と協同で作って、管理した。作る場所は決まっていた。

耕地： かつて、清水全体で約7町歩の田があった。里さんは約3反の田を所有していた。

肥料： ソテツの葉を細かく切ったものを、田植えの前に踏み込んで肥料にした。ユナギの葉を使うこともあった。馬や牛の下肥は使用しなかった。また、海にあがる海藻も使わなかった。塩分が多いため肥料には適さないそうである。

田植え： 一期作目の田植えは旧3月3日頃が最盛期だった。その際、近隣の人が手伝ってくれた。これをユイマワシといった。植えるのは女性の役割だった。田植えの後、ハマウリをした。その時にムシカラシといって、稲につく害

虫を手でとって海に持っていった。二期作目の田植えは、一期作目の稲刈りが終わってすぐ行った。三期作目は田植えは行わず、稲刈り後の育ちがよさそうな株をそのままにしておいて、成長したものを収穫した。これをマクバイと
いった。一期作目より二期作目、二期作目より三期作目の方が収穫高が減った。だが、三期作目の米は非常におい
しかった。

草取り：全部で三回した。除草機を使用した。アカショウビンという赤い鳥が飛来した時が一回目の草取りの目安だ
った。

灌漑施設：田の水は川の水を利用することが多かったが、湧水を利用する家もあった。

害虫・害獣：ウンカの被害がひどかった。

稲刈り：一期作目は旧6月に、二期作目は旧10月下旬に行った。田植えの際のユイマワシのようなことはなく、各
家庭で行った。

脱穀：海岸で乾燥させた後、カナゴキ（千歯こき）で脱穀した。その後、海岸の風を利用して籾の選別作業をした。

その他：現在でも、ウミガメが浜にあがる。昔はよく食べた。ひっくり返して獲る方法と潜って手づかみする方法と
があった。

神山信仰の現在

本並宏修

調査地概要：奄美本島、古仁屋。奄美大島の最南端部に位置しており、瀬戸内町の中で最も人口が密集し、町の中心
となっている。また、加計呂麻島や喜界島などの連絡船がある。古仁屋にある神社は高千穂神社。明治2年に創設。
明治20年に高千穂神社5社と八幡神社が合祀して現在の形になった。祭事に六月祭りと同大祭がある

加計呂麻島

於斉 加計呂麻島の中央に位置する集落。ここでは於斉の大ガジュマルと呼ばれるガジュマルが有名だったが、台風
で無くなってしまった。

佐知克 加計呂麻島の南部に位置する集落。於斉の分家が佐知克の地域に住み始めたのが始まりとされている。

生間（いけんま）加計呂麻島の東部に位置する集落。ここでは奄美大島のフェリーの連絡船が通っている。

神山あるいはテラヤマについて

■於斉：今は台風でなくなったが、昔は厳島寺（奄美では神社を寺と呼ぶ）があった。この寺は源鎮西為朝が流され
て、このあたりで身籠っていた妻が亡くなった。この母子を弔うために墓を境内に作った。この寺の周辺が神山とな
っており、テラヤマと呼ぶ。旧暦6月15日には近隣の集落で集まり、団子や餅を供える。

■古仁屋（奄美本島）：高校の上のほうにある森山がカミヤマでありそこをコウチヤマとよぶ。山の神や、ケンムンが
山に入った人を迷わせるので、入ってはいけないといわれてきた。近くに高千穂神社があるのでそっちのお祭りの印
象のほうが強い。

■生間：大きな松の木があり、その周辺がカミヤマとされた。大きな松の木には神が宿っているといわれる。その木
の周辺では木を伐ってはいけないとされている。

■佐知克：山の裾に池があり、そこから奥がカミヤマとされている。神山では木を切ったり小便をかけてはいけない
といわれている。また、山の神が下りてきて中央にある神社で休み、また山に登るといわれている。

比較

奄美大島のほうでは山の神の信仰をするより、山に入ったら迷ってしまう等の戒めの言葉になっている。一方、加
計呂麻島では、山の神の存在を話しており、神山もしくは山が信仰の対象になっている。本島のほうでは高千穂神社
などの神社があるのでそちらの信仰が強いから、神山の伝承はないといわれたが、加計呂麻島でも厳島神社や平家伝
説が多く残っている。

しかし、神山の伝承が色濃く残っており、本島と加計呂麻島の違いは何なのかが気になった。また、神山について
教えてくれた人は80歳以上の人が多く、それより若い人は神山について詳しくない人が多かった。

八月踊りについて

杉山未来

奄美では行事は旧暦で行われている。民謡なしでは奄美の文化を語ることはできない。祭りがなくなるということは、その集落が消えてしまうことに等しい。

●三八月

新節…旧八月の初丙。各家でカシキ(赤飯)を作り、仏壇に供える。新築の家を祝う(ヤーユワラシ)。集落の人が集まり八月踊りをし、三日間寝かせた酒がふるまわれる。

柴差…新節から七日目、十五夜前後。畑や屋敷の隅にススキを飾る。墓を掘りおこして改葬をおこなう。

ドンガ…柴差後の甲子の日。墓掃除をする。八月踊りはこの日で終了。

●八月踊り

八月踊りは集落によってさまざまなスタイルがある。家を軒ずつまわり、庭先で踊りを踊る。五穀豊穡、太陽崇拜、無病息災、先祖を敬う。踊りの合間には料理や酒がふるまわれる。太鼓のリズムに合わせて、男女で声を掛け合いながら明け方まで踊る。

丸平おみやげ店さんのお話

古仁屋では以前よりも子供が減った。家をまわるときに「バック、バック」という掛け声。古仁屋よりも名瀬の方が本格的に行っているのではないかと。

清水の川畑さんのお話

八月踊りは昔はもっと盛大であった。家をまわることを「ヤーミー」といい、お菓子などをふるまう。最近では人数が減り、朝まで踊ったりはしない。十五夜の日を月を見ながら相撲をとり、まわしをつけて踊る人も多かった。

保存会の方々、富浦さんのお話

ミヤー(広場)の中央で焚き火をし、40~50人で輪になって踊る。老若男女、貧富の差なく、わきあいあいと踊る。約70年前までは朝方まで踊っていたが、50年ほど前からは仕事などの関係で朝まで踊ったりはしなくなった。各家をまわったとき、イモをもらうことが多かった。八月唄などはすべて口で継がれてきたので、いつ誰が作ったのかはわからない。男女掛け合いの歌は、本土のような男尊女卑の考え方がなく開放的である。八月踊りの歌のタイトルは訳せないものが多い。

八月踊りの歌の種類

- ・米寿などの歳を祝う歌
- ・新築、新しい敷地を祝う歌
- ・読み書きできない親が子供に教える教訓歌
- ・十五夜で月の神に捧げる歌

八月踊りの補足と船魂信仰について

松本直樹

八月踊りは毎年8月の初めのヒノエから始まる(新節)が踊り自体は、遊びや節句などの行事のたびに踊ることがある。これら場合は、必ずしも踊らなければいけないというわけではなく、踊りたい人同士が各自集まって踊る。節句の中には名前がついているものがあり、次の時期に踊りが行われる場合がある。以下日付の表記は全て旧暦でのものである。

・三月三日(サンガツサンニチ)…女の子の節句。三角のもちをつくり、食べる。瀬戸内では、その年に生まれた女の子を生みに連れて行き、足を浸ける習慣がある。しないと、カラスになるといわれている。

・五月五日(ゴガツゴニチ)…男の子の節句。細長い餅を二本つくりカヤの葉で包んで食べたり供えたりする

・九月九日(クガツクニチ)…この日、踊りは集落ごとにある神社で行う。(古仁屋では高千穂神社)生魚を供える。

8月15日(十五夜)…豊年祭。集落単位で行う。公民館の土俵周りで行われる。さとうきびやトウガン、米などを

供え、拝んでから始める。

なお、踊りの前には魚(干物)を食べるという習慣があるのだが、豊年祭のときは魚を食べない。(豊年祭は山の神を祭るため。また新節の日、その年の新築の家の周りで八月踊りを行う習慣もある。

まず事前に区長から日時を通達がある。新節の日になると、家主がごちそうを用意する。やがて太鼓などの踊りの音が聞こえてくると、家の人は門の前に立って招き入れ、みんなでごちそうを頂く。そして家の周りを囲って踊り、終わると次の家へ向かう。家の周りを囲むスペースがないときは、近くの広場で行う。新築に限らず、家を改装したり、子供が生まれるなどめでたいことがあった家庭でも踊るようだ。

◇船霊信仰について 漁師さんの話一

船霊…海上安全を祈願して祀る神のこと。地域によって御神体がある場合とない場合があり、古仁屋ではこんびらさん(香川県にある金刀比羅宮のこと。海上安全の守り神として信仰されている。)のお札を船のどこかに置いて拝む。場所は決まっていなく、年配の漁師ならほとんどの人は信仰している。正月には、船の前と後ろの端に塩を盛って拝むこともある。家族で魚を食べ、その年の大漁を祈願する。

奄美の食について

佐藤寛士

初めに このたび、民俗調査として奄美大島を訪れさせていただきました。私の専門は「食」ということで主に島料理について調査を行い、ここに報告をおこないます。

○三献

正月や祝い事の時に食す儀式料理。三つの料理を決められた順番に食す。食す順番は以下のとおりである。

①餅の汁(四角餅・すまし汁・具はしいたけ、三つ葉) ②刺身(タコ、魚) ③吸い物(すまし汁・具はカンパチ、ニンニク、ねぎ) もしくはシンカン

今ではしないが、三献を食している間は家長以外は喋ってはいけないというお話もあり、もともとは儀式的な色が強かったと考えられる。

※内地でも三献なるものが行われていた。これは武士が出陣の時、打ちあわび、勝ち栗、昆布の三品を肴に酒を三度づつ飲みほす儀式で『三献の儀(さんこんのぎ)』或いは『式三献(しきさんこん)』と呼ばれていた。現在では神前結婚式で行われることもある。

○シンカン

上記にあったシンカンは、専門の陶器(図1)に、肉(豚足、猪など)、卵、魚、野菜などに盛り付ける料理である。残念ながら現物と巡り合えなかったが、必ずお話しにすることから奄美の伝統料理、郷土料理といえる私は考える。また、いくつかの資料では瀬戸内独特の習俗と紹介されている点も興味深い。

図1



○ケイハン(鶏飯)

奄美の郷土料理として有名になっている。実際に御馳走になったケイハンは、七つの具をご飯にのせ、鶏ガラスープをかけて完成となる。

七つの具は、①鶏のささみ ②錦糸卵 ③ハム・ベーコンの漬物 ④シイタケ ⑤のり ⑥ねぎ ⑦みかんの皮となっている。今回調査を行った際に、ケイハンは北部のもので最近存在を知った。もしくは、本格的なものを知りたいなら北部に行ってみては、という声が多く、奄美島内において異なった食文化が形成されていたと考えられる。

○油ソーメン

奄美の家庭料理で、そうめんと野菜(図3では玉ねぎ、ニンジン、ニラ、ねぎ)、豚肉を炒め、だし汁と醤油を混ぜ合わせ、水分をとばして完成となる。地域、家庭によって味付けが異なる。だし汁は主にジャコや昆布を使用する。

内地のそうめんのイメージよりも沖縄のチャンプルに近い調理法である。

○黒米

奄美で栽培されている黒米を白米と一緒に炊くことで、内地の赤飯のように御飯を着色する。黒米がない場合は、ハンダマ（野菜）を着色に使用することもある。

○豚骨とツワブキの煮物

豚骨とは、豚のあばら肉である。大晦日にはこれを食べて年を越す。

○ジーマーミー豆腐

ジーマーミーとは地豆（ピーナッツ）のことで、一度炒めたあとすり潰し、豆腐にする。

○カボチャモチ

島かぼちゃ（水っぼい）をつぶして、砂糖を加える。それにゴマをまぶし、揚げる。中にあんこを入れることもある。

○ヨモギモチ

別称フティモチ。ヨモギ、黒砂糖、餅粉を使用して作る。出来上がったヨモギモチはゲットウの葉で包む。

○リュウビモチ

別称ジョウビモチ。お盆には、カタガシ（ラクガン）とともに出される。

○パパイヤ

青いパパイヤを漬物などにする。漬物にするようになったのはわりと最近。昔は四等分し、塩をして干し保存食にしていた。食べる時は塩や味噌をつけた。

○シブリ（冬瓜）

煮物や汁ものなどに使用される。台風がきそうな時には、島かぼちゃなどとともにもぐりに収穫し台風がすぎるまでそれらで食料をまかなっていた。

○ソテツ

実を砕いて水にさらし、デンプンをとっていた。飢饉等の時の救荒食。

○ハブ

一般的ではないが、島の猛者が食べるらしい。その時は、煮る、焼くなどあまり手をかけない。また、粉にしたものは結核などに効く。

○その他聞き書き

※お盆2日目には小豆のおかゆと味噌汁を食べる。

※お盆3日目には、ご飯、味噌汁、3色煮物を食べる。

※法事では、餅の吸い物と豆腐の味噌汁（白豆腐、生姜）と、2種類の汁ものを出す。

※法事の煮物は①切干大根②コンニャク③揚げ豆腐④昆布（法事なので偶数）

※法事では刺身は4切れ（偶数）、正月は2切れ

※めでたい時にはタコの刺身を出す。タコは吸いづくからといわれている。

終わりに

今回、奄美の食文化について調査を行って率直に驚きを感じた。三献やシンカン、年越し料理などの習俗的な違いや、シブリやパパイヤなどの食材の違い。内地とは異なった文化に対するギャップは大きなものがあった。それゆえに奄美の食文化は大変魅力的だった。

しかしもっとも魅力的だったのは、奄美の方々の温かさ。これ以上に魅力的なものがあるか。いや、そうそう無いであろう。滞在できた時間はほんのわずか、しかしそこで得たものは計り知れなく大きい。それもこれも、私たちを温かく向かい入れてくださった奄美の皆様のおかげです。儂越ながらこの場をお借りして御礼申し上げます。

なにかとご迷惑をお掛けしたと思いますが、奄美ですごした日々はかけがえのない思い出です。みなさん、本当にありがとうございました。どうかくれぐれもお体に気をつけていつまでもお元気で。

こんな奄美エコツアーを提案します

「シマ時間」について

「この奄美大島に来てすごく時間がゆっくり流れているなと感じました。都会では時間にしばられていたのが、ここにきたら、時間にしばられない生活、これが大きな違いだなと思います。」・「時間の流れ方が早いとか遅いとかではなく、流れ方が静かというか、言葉では表現しづらいのではあるが、都会を流れる空気とは、その密度が違うような気がわたしには感じられた。ただ海辺を散歩しているだけで、イヤホンで耳を塞がずとも、波の音が、風の音がして、飽きさせない。気づけば時間が過ぎている。それを時間を無駄にしたという気持ちにさせない、時間の流れ。」・「私は沖縄旅行に行ったこともあるのですが、沖縄では車のスピードぐらいでしか島のゆっくりした時間を感じることはできませんでした。それはきっと、沖縄には…観光向けの施設が多く、観光客も多いからだと思います。…一方、奄美では…観光客用に整備された施設が少ない代わりに、本州では見られないような自然のありのままの姿を見ることが出来ます。そして、観光客向けのスポットが少ないため、人々も島独特のカラーを残したままであるように感じました。島も人も、変に観光客向けになっていないため、奄美の島自体をそのまま感じる事が出来ました。」・「自然のエネルギーに負けない生命のエネルギーを持つのが奄美に住む人達です。彼らのその活力の源、それは島が持つ独自の“時間軸”にあるのではないかと考えました。僕達本土の人間が時間を短く短縮して効率よく生きていこうとするのに対して、島の人達は時間の流れに乗るようにして生きているように感じました。生き急いでいる、島の暮らしに身を置いて自分自身の生活を思うとそう感じました。」(報告集「私が奄美で体験したこと」から)

■ 「シマ時間」を体験するのが奄美エコツアー

- これまで「観光」といえば、《有名な歴史的な名所や風光明媚なスポットを見てまわる》というコンセプトの上に組み立てられてきた。
- わたしたちが新たに追求しようと思うのは、そうした旧来の「観光」ではない「体験」型のエコツアーである。まずポイントは次の3点である。
 1. たんに「見る」のではなく、「体験」することがポイントだ。「体感する」・「出会う」・「共に遊び、歩き、つくる」を「体験」を産み出す3ポイントとしたい。
 2. 「名所」を「見る」のではなく、「都会」世界とは異なる、別の空気が流れる「自然との共生」世界を、《世界》あるいは《宇宙》として体感することがポイントである。「名所」という個々の形を超えたもっとトータルな、いわゆる言い難いが確実に感じられる、或る別な《世界》・空気・時間といったものを体感することがポイントである。
 3. 《自然をとおして人に出会い、人をとおして自然に出会う》ということができたときにこそ、「自然との共生」世界を体感できる。

私たちの結論

奄美エコツアーの中心テーマは《「シマ時間」を体験する》である。

「シマ時間」に包まれるためにまず星空と出会う。「夜」の神秘と出会うツアーを考える。

★ふつう「夜」は観光の対象になりません。たいてい夜は観光では宴会タイムか買い物タイムです。しかし、奄美エコツアーでは「星空」体験・「潮騒」体験を筆頭とする「夜」の神秘と出会うツアー・タイムが不可欠です。満天の星空の下、宇宙の闇に包まれた浜辺に降りて、潮騒に包まれていると、海の巨大さと天の巨大さが潮騒とあって私を包むという体感を得ます。星空体験だけでなく潮騒体験も欠かせないとはみんなの意見でした。

★「夜」の本当の漆黒の闇もまた奄美ならでの体験です。ほんとうに真っ暗な怖い夜に出会えるのも奄美の魅力です。★夜の浜辺では「海ホタル」(夜光虫)にも出会えました。瀬戸内観光協会の観光コーディネーターの金沢充啓さんによれば、夜にモーターボートを繰り出して、船尾に竹箒をつけて走ると、それはそれは美しい夜光虫の光の輪が楽しめるそうです。これもぜひ体験できるように企画したい。★奄美のクロウサギに出会うことができるのも夜です。夜にはフクロウを鳴きますし、カエルの鳴き声はあたりじゅう響いています。

■シマの人たちと相談して、奄美の「夜」の神秘に出会うツアータイムの企画を豊かに練り上げたい。そのために、観光コーディネーターの金沢さんや、「奄美の自然を考える会」・「奄美の野鳥の会」等の自然観察・保護団体の人々、そして集落の人々にも参加いただき共同の企画会などをもち、いくつかのプランとそれを保障する人的ネットワークを立ち上げたい。

星空体験

「私が奄美に来て一番印象に残っていることは、星の数の多さです。私の地元は大阪ですが、建物の明かりや街灯で空が明るく、星がほとんど見えません。奄美に来て最初の夜、空を見上げてびっくりしました。空は真っ暗で 360 度どこを見ても星があり、視力の悪い私でも星の色やまたたきがみえたからです。加計呂麻島までは流れ星を見ることもでき、本当に貴重な体験ができました。大阪にいるときはあまり空を見ませんが、奄美にいるとついつい空を見てしまいます。それほど都会の人間にとって奄美の星空は魅力的なものなのだと思います。」

「夜の奄美の空いっぱいの星を見ていたら、綺麗という想いだけでなく、自然の不思議、生命の不思議について考えさせられました。星空が私にとって一番印象的な奄美の景色です。時間に縛られて生活していると視野が狭くなりがちですが、奄美でのんびりした時間では視野が広がります。普段の生活では大きく思えた悩み事も、大きな自然を感じていると小さなものに思えてきます。」

「夜のメインイベントが、徳浜の海辺で、星空の下テントをはって寝る。というものでした。なんとも見事な三百六十度星まみれ。『まみれ』という言葉はあまり良い感じがしないので、満天の星空と言いましよう。流れ星もたくさん見ました。波の音と、キラキラと星で埋め尽くされた空、あの空間は一生忘れません。」(報告集「私が奄美で体験したこと」から)

「シマ時間」に包まれるために海をトータルに体感しよう。そのためのガイドライン的マニュアルを、シマの人々、とくにシマの青年たちと共同でつくりたい。

■水泳用ゴーグルで十分できる海中探訪ガイド（推薦の浜、その浜で見ることができる種魚・ヤドカリ・ウミガメ、等の情報、潮の満ち引きに関する情報） ■磯遊びガイド（磯の生物とその面白い生態についてのガイド）

■海釣り体験は、海の大きさをゆったり体験し、南島の魚の美しさに出会い、釣りの面白さを体験するうえで欠かせない。学生料金で海釣り体験ができるネットワークを立ち上げたい。（これは既に瀬戸内町清水の民宿ユートピアがやっている） ■浜で貝殻を拾う楽しさと、拾った貝殻でちょっとしたアクセサリやおしゃれな小物（貝細工で装飾した小箱、網バッグ、等）を作る楽しさを連結するネットワーク上の工夫。（これは既に瀬戸内町清水の民宿ユートピアがやっている） ■台風余波などで海が荒れた時、そのときこそ海の恐ろしいエネルギーを体感できる得難い機会だと、十分用心しながらも浜に荒れる海を見に行こう。 ■海に落ちる夕陽を見る。於斉の区長さんは、於斉から車で10分ぐらいのところ絶景の夕陽スポットがあるから、今度来た時は、そこにいけるように於斉の人々の協力——車移動のための——を組織してあげるといつてくださいました。海釣りの帰りに夕陽が海に落ちかけていました。とてもよかったので、夕陽鑑賞堪能はぜひ今度実現させたいです。

海の怖さを体験する

「空は雲で隠れ風が肌を押し出すかのように吹き寄せる。海は荒れ波が押し寄せ青をにごらせ山の緑を包むかの勢いでした。つまりは嵐、……自然のことは運任せでついてないと思う反面、人の思考や感情をものもしない暴れるような嵐に改めて自然のエネルギーをこの身に感じました。美しい自然、そんな当たり前な言葉の現実とはまさに語刃の刃で、青い空はスコールを呼び心地よい波音が船をも飲み込む悪魔へと変わり、心やすらぐ山の緑がハブヤイノシシといった人外の脅威を生み出す、のどかな島の暮らしは自然に支えられている反面自然との闘いであると思いました。」

「塩工房のそばの海は悪天候で荒れ、以前見た穏やかで青くキレイなものとは違う姿をしていました。空は暗く、風は強く、波は高く激しく、すさまじい勢いでこっちにどんどん迫ってきます。自然の驚異というものを肌で感じました。心臓の奥がぎゅっと怖がっているのが分かりました。」（報告集「私が奄美で体験したこと」から）

「シマ時間」に包まれるために「生き物との出会い」ツアー タイムを企画しよう

「生き物との出会い」ツアータイムを実施することが同時に奄美の青年や老人との人間的な出会いの機会でもあるように、うまく自然との出会いと人との出会いを組み合わせるといふ原則を立てて、この企画を追求したい。

「生き物との出会い」ガイドがいたら、このツアーはいっそう面白くなるはず。

1. 鳥ガイド
2. 昆虫ガイド
3. 爬虫類ガイド
4. 薬草ガイド
5. ハーブガイド
6. 花と果実と野菜ガイド、等々がいたら、それを集落の人々のなかで得意な人がやってくれたらとてもいい。

「シマ時間」に包まれるために、シマ時間を生きている面白人間に出会う。

この2010「アイランドキャンパス」では、清ゼミは9月3日に奄美の面白人間に会いに行く（奄美のブッシュマン里さん、民宿ユートピアに賭ける円山さん、陶芸喫茶店コンブチの藤井さん、釣り人生の実現のため東京から移り住んだ三井さん）という出会い体験企画に取り組みました。藤井ゼミはそれぞれいろんなシマの人に関書き調査に入りました。

■この出会いを確実にできるようにするためには、事前の根回しと計画がまずしっかり立てられている必要がある。奄美にはたくさん面白い奄美人がいるから、ちゃんと企画すれば必ず面白い企画ができる。

たくさんさんの生き物と触れあう

「奄美大島では、都会では決して見ることのできないありのままの自然を見ることが出来ます。……その中で私が特に驚いたのは様々な生き物と出会えることです。海では白、黒、青、黄など、色とりどりの魚が泳いでおり、浜辺ではカニやヤドカリがせわしなく動いていました。また、山では、不気味な色をした蝶や蛾がヒラヒラと舞い、カラフルな日本トカゲや絶滅危惧種とされている木登りトカゲも見ることができました。都会に住んでいると図鑑でしか見ることのできない生き物を実際にこの目で見る事ができることが奄美大島の魅力だと私は思います。……奄美大島のエコツアーを企画するのなら、生き物と触れ合うことのできるようなイベントを盛り込んでみるときっと面白いと思います。」

奄美の人の温かさに出会う

「民宿ユートピアの主人、円山さんに自身が経営している養鶏場について話を聞かせてもらった。彼は公務員の三年の定年を残して民宿を始めたわけだが、民宿だけでは自給自足に苦しむそうだ。そこで養鶏場を建設し、アヒル、チャボ、ニワトリ、ドラゴンフルーツ、バナナ、パパイヤなどを育て、収穫した卵やフルーツを売ることによってそれを副業として生計を立てているそうだ。奄美大島のような自然に溢れた土地で、「何をできるのか」ということを考えながら知恵を絞って生活しているのだなあと感じざるを得なかった。」

「この喫茶店は大阪のものとは少し違うのです。音楽が流れていなくて、マスターとの会話や窓のそとの風景をながめたり、とても静かで自分を見つめ直したり、考え事をするのに最適でした。」

「奄美に住んでいる方からお話を聞く機会がたくさんありました。お宅に訪問させていただいたり、講演をしにきていただいたり、また、いろんな場で出会った方々がすごく気さくに話しかけてくれたりもしました。そういったなかで、奄美の人はすごく温かいなということを感じました。……奄美の人々は、八月踊りなどの行事ではみんな一緒に踊って楽しみ、何かあれば近所どうして助け合う、というように、本当に人と人との関わり合いを大切にしているんだなと感じました。……わたしたちが大阪での生活と比べると、やっぱり不便なんじゃないかなと感じることも、奄美の人たちは、ないものは自分たちで作っていく、自分たちの力で暮らしていく、というふうに、すごくそれを楽しみながら奄美で暮らしているんだなと感じました。だから、これから奄美を訪れる人には、きれいな海や星、自然を感じてほしいし、奄美の人とたくさん会って、たくさん話す機会を作ってほしいなと思います。」

「★島の人：困っているとすぐ助けてくれる島の人、榊さんや里さんの親しみやすさ、円山さんの熱さ、奥さんの優しさ、島の若い人たちのノリのよさ、よそ者(私たち)をありのままに受け入れてくれる、みんな奄美のことが好き、第二の人生を送る人が多い」
(報告集「私が奄美で体験したこと」から)

歌と踊りが大好きな奄美の人々と一緒に歌い踊る

「まず、島人が住む奄美の魅力を私が感じた視点から3つ項目を上げ、振り返りたいと思います。①八月踊りの期間はその半分以上を踊りに費やす位、踊りを愛してやまない奄美の人々は「踊り」という文化を通じて自然と人と人との心もつないできたのではないかと。②島唄文化が強い土地柄もあり、島人皆歌が上手い人達ばかりだなあと感じた。③困っている人を決して見放さない人々の温かさに触れることが出来た。この3つが島人と出会い、話をしたりする中で私が感じた奄美の魅力でした。……いろんな離島ならではの困難さがありながらも、島人が楽しく暮らしている様に感じられるのは、根本に島の人の温かさ、助け合う気持ちを皆が持っているからこそだと強く感じました。」

「奄美大島では、皆が音楽に対して親しみを持ち、楽しもうとする心を持っていたように思います。私は、島でバンド演奏する機会がありました。演奏の良し悪しはともかく、聴き手からその演奏を着にして楽しもうとする意思が伝わってきました。私の住む大阪では、聴き手は「客」として「楽しませてもらう」受身の姿勢が多いのに対し、こちらでは、「仲間」として「一緒に楽しむ」姿勢で音楽に素直に向き合っているように思いました。逆に演奏しているこちらが楽しませてもらう奇妙な体験をしました。奄美大島の音楽は、「島唄」や「八月踊り」という民謡を体験しましたが、それらは、歌い手と聴き手が区別される形式のものではなく、聴き手も参加して盛り上がることで楽しめる楽しい音楽でした。特に「八月踊り」は、チンドンと呼ばれる太鼓のみを使ってリズムを取りながら人々が取り囲み円になって、手と足を使いひたすら歌い踊り続ける、体力的に厳しいものですが、不思議と楽しくなってくる面白いものでした。また、島のライブハウスに行く機会がありましたが、それは、よくある「ライブハウス」とは少し毛色が違いました。一見バーのようで、店の傍らに演奏するスペースが設けられており、誰でもそこにある機材類を拝借して自由に演奏できるようなっていました。演奏するための支払いも聴くための支払いも要りません。もちろんタイムテーブルもありません。そこで島唄を歌えば、カウンター裏から合の手が飛んでくる、そんな開放的な音楽を味わうことができました。」(報告集「私が奄美で体験したこと」から)

シマ唄・八月踊り・ライブハウスで一緒に楽しむこと
「シマ時間」の人間的基盤を体験する

二〇一〇年の「アイランド・キャンパス」では、九月四日のバ
ーベキュー交流会で三人の方の掛け合いによるシマ唄を堪能。交
流相手の青年たちと六調を一緒に踊る。九月五日に古仁屋のライ
ブハウス「マツチボックス」で経営者の大輔さんと一緒にライブ
をする。九月六日に古仁屋八月踊り芸能保存会の富島甫さんの講
演、その後保存会の人たちと一緒に八月踊りを踊る、というよう
な音楽芸能体験を積み重ねることができた。

奄美のシマ唄・八月踊り・六調（踊り）等は、多くの困難を抱
えながらも、それに負けずに奄美の人々が元気よく生きてこれた
魂の活力源である。だからそこに奄美の人々の魂がこもってい
る。それに直に触れ、一緒に歌い踊る楽しみを体験することなし
には、「シマ時間」は体験できない。痛感！

2010年9月2日より8日まで、近畿
大学文芸学部文化学科現代文化コー
ス・清ゼミは鹿児島県離島振興事業「ア
イランド・キャンパス」に応募して、
「学生自身の体験に基づく奄美エコツ
プー企画立案」を目的として、奄美大
島瀬戸内町に滞在した。以下はその滞
在経験から生まれた。その経験を示す
ため、報告集「私が奄美で体験したこ
と」からたくさん引用した。

台風余波など、雨天の場合のツアータイムの過ごし方を事前にきちんと準備しておく

奄美を台風がとおらなくなったとはいえ、台風余波などで雨天に出会う可能性は多い。だから魅力的な代替プランは必須である。「今回は台風の影響で雨の日に何日かぶつかってしまいました。雨の日用のプランも考えておく必要を痛感しました。具体的な案としては、芸術コースの人達がユートピアの方に教わりながら、貝殻などを使って写真立てをデコレーションしていたので、それなら雨の日でもでき、民宿の方とも親睦を深めることができるのでよいのではないかと思います。またカフェこんぶち横の陶芸教室に参加するのもよいのではないのでしょうか。」（報告集「私が奄美で体験したこと」から）

- ① 貝殻によるアクセサリや装飾小物づくり
- ② 簡易陶芸教室
- ③ 人物訪問
- ④ シマ料理づくり体験
- ⑤ シマ唄・八月踊り・六調体験
等が考えられる